

青木正児著『支那近世戯曲史』の漢訳と評価について(続)

——王古魯による訳著を中心に——

辜 承 堯

Study on the Chinese Translation of Aoki Masaru's *The History of Modern Chinese Opera*: Focusing on the translation of Wang Gulu

GU Chengyao

Abstract:

This paper focuses on Wang Gulu's translation of the representative work by Aoki Masaru's *The History of Modern Chinese Opera*. Since its first publication in 1936, the translation has been revised four times by six publishing houses. This paper analyzes the main features of each version by comparing the differences among them.

Although the first edition deletes the professional terms related to the Japanese opera in the original work, it is faithful to its original translation. In the second edition, the translator Gulu modified the relevant expressions in the original work that did not conform to socialist ideology. The translator corrected the sentence misunderstandings in the original work, used the most recent research to correct the errors, and added a large amount of theatrical materials, including his own filming done in major Japanese libraries. These revisions are important in my view. The third edition was mainly revised by Tan Zhengbi. He replaced Wang Gulu, who was suffering from severe hypertension at the time, to correct the incorrect opera names and add new opera materials to the original work. The fourth edition was revised after Wang Gulu's condition improved. He made more than 120 corrections of the typos, punctuation, and sentence errors present in the third edition and added several recent research results. The fifth edition restores the technical terms of the Japanese opera omitted in the first edition, modifies the words and expressions that were modified due to ideological issues in the second edition, and adds some supplementary notes from the author.

Keywords: Aoki Masaru, Wang Gulu, Tan Zhengbi, *Chinese Opera* history, Chinese translation

キーワード：青木正児、王古魯、譚正璧、『支那近世戯曲史』、漢訳

はじめに

本誌の前号に掲載した拙稿は主に青木正児の代表的な戯曲論考に対する漢訳をめぐる論じたものである。本稿はその続編として、王古魯が漢訳した『支那近世戯曲史』の初訳本と四つの修訂版を中心にその特徴や修訂状況を明らかにするものである。

以下の表一に示したように、王氏による初訳本は1936年2月に上海で出版されてから、四度にもわたり修訂や増補がなされ、香港や台湾を含む六つの出版社により再版される。初訳版よりすでに九十年近くが経っている現在に至っても、中国戯曲研究においてこの王氏の訳著『中国近世戯曲史』をぬきにしては語れないと言っても過言ではないだろう。

表一 王古魯により漢訳された『支那近世戯曲史』の各版本

訳者の表記	書名	出版社	初版時間	略称
王古魯訳	中国近世戯曲史	商務印書館（上海）	1936年2月	初訳本
王古魯訳著	中国近世戯曲史	中華書局（北京）	1954年9月	修訂増補本
王古魯訳著	中国近世戯曲史	文芸聯合出版社（上海）	1956年1月	三版本
王古魯訳著	中国近世戯曲史	作家出版社（北京）	1958年1月	四版本
王吉廬訳	中国近世戯曲史	商務印書館（台湾）	1965年3月	台湾本
王古魯訳著	中国近世戯曲史	中華書局（香港）	1975年4月	香港本
王古魯訳著・蔡毅校訂	中国近世戯曲史	中華書局（北京）	2010年1月	最新本

本稿は、初訳本から最新本に至っていったい如何なる修訂や増補が行われたのか、また二年にも満たさない時間内になぜ修訂増補本、三版本、四版本と相次いで修正を加えられたのかについて、各版本と青木の原著との比較、さらには近刊された王氏とかかわる書簡を通じて、これらの問題を明らかにしていく。

一、鄭震の抄訳本に次ぐ王古魯による初の完訳本

この初訳本は737頁にも達する初の完訳本で、1936年2月に上製本で出版され、二年後の1938年6月に並製本で再版された。いずれも表紙には思想家の章炳麟が揮毫による題署が見られ、音律に詳しく自らも戯曲の脚本を創作していた中央大学の教授呉梅から序文が寄せられている。この呉梅による序文では「詳密で該博、青木君は善く読書する者と言うべきだ」と激賞している。一方で、王氏の入念な漢訳に対して「青木君の引用した諸々の書籍に対して、出典と逐一照合している。外出中にも翻訳作業をやめたことがなかったとのこと。書中に付け加えた数多くの参考文は原文への是正や補足であり、この功績は甚だ大きいものである」と、高く評価している。

確かに呉梅が評したように、この王氏による初版本の一つ目の特徴は原著への忠実度の高さである。これについて、王氏自身は「訳者叙言」で「私は原著の通りに忠実な翻訳を施し、この訳著への理解に役立つ資料があれば必ず手に入れようと尽力している」と語っている。忠実に翻訳するために、王氏は原著の句読点の誤りさえも勝手に直さず、注記と参考文の形で指摘することにしてきた。有り難いこと

に、王氏は初訳本の出版前の1934年6月14日に、手紙で青木に主たる四箇所の句読点の誤りを伝えていた。そのうちの一つ目である、王世貞の『芸苑卮言』への句読点のつけ違いを実例として挙げておく。

原著の原文（100～101頁）

明の王世貞著『芸苑卮言』に曰く「大江以北、漸く胡語に染み、時々採入して沈約の四声遂に其一を闕ぐ。…王応^マ稍や復た新体を変じ、号して南曲と為す。高拭則誠（按ずるに拭は明の誤なり。高拭は別人なり。）遂に前後を掩ふ」と。王応の南曲余未だ之を見ず、又未だ其の行事を詳かにせずと雖も、世貞は博識必ず本く所あらん。然らば則ち南戯革命の先鞭を着けし者は王応にして、之を完成せる者は元末の高則誠なり。

初訳本の訳文（76頁）

然明王世貞『芸苑卮言』曰：「大江以北、漸染胡語、時時採入、而沈約四声、遂闕其一。…王応稍稍復変新体、号為南曲。高拭則誠（按「拭」為「明」之誤、高拭為別一人。）遂掩前後。」（此段引語、青木氏誤分句読。致將「王応」与「稍稍復変新体」連読、遂生下文舛誤之論断。読者請參閱「訳者叙言」及本章〔参考一〕。訳者注）王応之南曲、余雖未之見、又不詳其行事、世貞博識必有所本。然則着南戯革命之先鞭者為王応、完成其革命者為元末之高則誠。

初訳本に附録されている参考一（85頁）

青木氏所引王世貞『芸苑卮言』之原文「…但大江以北、漸染胡語、時時採入、而沈約四声、遂闕其一。東南之士、未^レ盡顧曲之周郎；逢掖之間、又稀辨^レ搥之王応。稍稍復変新体、号為南曲。高拭則誠、遂掩前後。…」

（訳者按）讀上文、顯然將王応与周郎並提、以襯知音者之稀少、而説明詞曲之所以「稍稍復変新体」而產生南曲者。青木氏誤分句読、遂至論断王応為「着南戯革命之先鞭者」、誤也。

王世貞の『芸苑卮言』には確かに、元の中葉に不振に陥った南戯を再興させたのが高拭則誠だとの結論を示しているが、その変遷過程について述べている「東南之士、未^レ盡顧曲之周郎」と「逢掖之間、又稀辨搥之王応」とは、明らかに古文に常用される対句の修辭法になっているが、青木の意識では「王応」をその続きの「またやや新たな文体に変わり、南曲と称される」の主語にし、「王応」の前の部分を省略してしまっていた。筆者が下線で示したように、王氏の訳文では、原著を尊重する原則に従いそのまま翻訳されているが、括弧をつけてその誤読を指摘したうえで、該当章の最後に参考文として句読点付きの原文を附録している。因みに、修訂増補本では王氏は割注と参考文を削り引用漢文そのままに訳出している。この訳し方からも初訳本の原著への忠実さの一端が窺える。

王氏に宛てた青木の返信は現存していないが、幸いなことに、万国鼎という初訳本の編集者宛てに王氏が書いた手紙から青木の反応を窺うことができる。これは1935年6月13日付の、王氏は原書第十六章を補足し得る自らの論考を初訳本に添附するために、編集者に送った相談の手紙である。その中に句読点の誤りを指摘された青木の反応が以下のように記されている。

（前略）特に原著の第十六章「沈璟の『南九宮十三調曲譜』と蔣孝の『九宮』『十三調』二譜」に

については、青木が執筆時に蔣孝の曲譜を見ていないにもかかわらず、精密に推察できていたことにまさしく感服させられました。しかし、近年になって北平図書館はこの書が収蔵されたので、私はこの書の鈔本を入手した後、論考「蔣孝旧編南九宮譜与沈璟九宮十三調曲譜」を執筆し、『金陵学報』第三卷第二期に発表しました。その拙文に青木の見解に対して少し是正を加えている所がありましたので、刊行後、青木にこの一文と、原書を翻訳する際に発見した幾つかの誤りとを添附して送りました。去年六月にその返信が届きましたが、青木は私の指摘に対してあまり反応を示していませんでした。(中略) 私はこの一文は青木原著の第十六章と互いに実証し合うところがありましたので、この訳書をより良くするために、この一文を附録として入れたいと思います。(後略)¹⁾

下線部の「青木は私の指摘に対してあまり反応を示」さなかったことは、名古屋大学附属図書館の「青木文庫」に保存されている王氏から青木に宛てた1934年9月11日付の手紙に「先生のおっしゃった通り、二つ目以降は関わりが至極微小でございますし、一つ目は先生のお導きになった結論と関わっておりますゆえ、私はこの部分を勝手に改正することなく、ただこの節の末尾に付記を加え、王氏の原文への解釈と本著との微小な差異を説明したにすぎません」という一文からも裏付けできる。ゆえに、王氏の指摘を素直に受け止めなかった青木は、同手紙に「先生から序文を賜うことはできますでしょうか」という王氏からの要望にも応じずじまいだった。

二つ目の特徴は青木の独特な戯文調の表現に対する是正や、中国の読者に難解な日本の戯曲の専門用語に対する省略であった。王氏は日本人の読者に理解しやすくするために、原著で引き合いとして出された日本戯曲に関する二十箇所の原文を漢訳から省いている。これについて後述の第五節で論じることとする。このほか、訳文の表現をめぐる両氏の往復書簡からは、さらなる齟齬も見受けられる。

初訳本が出版された翌3月20日に、王氏はこれを青木に進呈した。原著で『琵琶記』の物語の由来について、「作者の友に王四なる者有り、及第の後其妻を棄てたるを諷して此記を作る。故に之に名くるに「琵琶」を以てし、其字形に王字四個あるによりて王四の名を隠すなり」という一説を挙げている。これに対して、青木は「蓋し第一説の如きは支那人一流の附会の説なるべく、一笑に付して可なり」と評していたが、この評語に対して、王氏は「〔附会〕の前に「支那人一流」と前置きするとは、まさか「附会の説」に国籍の別があるとでも言いたいのだろうか。このような箇所はただ人の恨みを買うばかりなのだから、著者が今後文章を為す際にはくれぐれもこの点に留意してもらいたい」²⁾と厳しく批判したうえで、この評語を「蓋如第一説為一般附会之説、可付一笑」と意識している。

「罵詈雑言に近い」と王氏が評した青木の表現もあった。例えば、戯曲目録集の『曲海目』と呂天成の『曲品』はいずれも伝奇の「櫻桃夢」と「靈宝刀」を「任誕先」の作としている。鄭振鐸はこれを根拠にして、その著書『文学大綱』で「靈宝刀は任誕先の作と為す……誕先一に誕軒と作す、浙汜の人、生平未詳」との説明を加えている。この踏襲に対して、青木は『曲海提要』に見られる「韓王小伝原奇妙。奈譜曲梨園草草。因此上任誕軒中信口嘲」という曲辞に基づき、「任誕軒」は高漫卿（別名は陳与郊）の

1) 王古魯著・苗懷明整理『王古魯小説戯曲論集』（中華書局、2013年）296頁。

2) 王古魯「訳者叙言」、『中国近世戯曲史』初版本、12頁。

屋号で、「靈宝刀」の作者は架空の「任誕先」ではなく「陳与郊」であることを明らかにしていた。さらに、鄭振鐸が「軒」を「先」と転訛した原因について、青木は「之を「任誕先」の作とせる「軒」(hsüan)と「先」(hsien)（並に上平声）と音相近きに因りて訛れるなるべし。鄭氏が之を以て「浙汜の人」と言へるは、或は「靈宝刀」の序に此語見ゆるに本けるものか」と推測するとともに、このような緻密な考証を怠った付和雷同の研究を、「是れ皆一犬の虚吠を伝ふるものにして、「任誕先」は実は人名に非ざるなり」と揶揄している。この戯文調の評論に対して、王氏は「この類の表現はいずれも人を不快にさせる」とコメントして、「是皆為人云亦云之説」と意識している。

三つ目の特徴は原著を執筆した時点での青木の未見資料やそれ以降に新出した資料を、王氏が蒐集の限りを尽くして参考文献として各章末に付け加えたことである。例えば、呂天成の『曲品』や焦循の『劇説』、黄文暘の『曲海目録』、王国維の『曲録』など従来の戯曲書はいずれも「望湖亭」「翠屏山」「耆英会」という三つの伝奇を沈璟の作としているが、青木は蔣瑞藻の『小説考証』（1919年）に従い、これらの作は沈璟の甥である沈自晋（鞠通生を号とする）の作としていた。この説を確かめるために、青木は当時北京に留学中だった倉石武四郎に「鞠通生小伝」の書写を依頼したが、結局手に入れられず、原著の注記で「半歳を経て未だ之を得ず。遺憾ながら今之を缺く。姑らく小伝の存在を記して読者の参考に供す」と断るしかなかった。この「遺憾」を汲んだ王氏は、北平図書館の袁同礼館長を通じてこの伝記の抄録を同館に依頼し、さらに沈自晋の末裔である沈臨莊が活字した非売品の『鞠通樂府』（1930年）を呉梅が収蔵していたことから、これを書写して、青木の推論の裏付けとして参考文献の形で附録としてつけている。

王氏は原著に参考文献を補うにとどまらず、前出した手紙で初訳本の編集者と相談した結果、原著の第十六章「沈璟の「南九宮十三調曲譜」と蔣孝の「九宮」「十三調」二譜」の後に、「国立北平図書館所蔵之蔣孝旧南九宮譜」と「蔣孝旧編南九宮譜与沈璟南九宮十三調曲譜」という十八万字にも達する自身の新たな論考を附録一・二として増補することになった。

二、階級的イデオロギーの烙印を押された修訂増補本

上下二冊構成のこの修訂増補本は1954年9月に並製本で出された。日中戦争を挟み、無産者階級の代表として共産主義の実現を掲げる中国共産党による建国を経て、初訳本より十八年間も隔たったものであった。その出版背景について、王氏は1954年1月4日に書いた「重版本的修正増補」では、「需要は頗る盛んでどこでも購入できず」という読者からの需要のほか、「かつて訳者の私は出版社と一切のやり取りをしていなかった」ために、戯曲の曲辞での肝心な「正字」と「襯字」さえ区別をつけていないなどの誤植があったと説明しているが、これは表面的な理由にすぎず、より肝心なのは新出資料による原著への修正や、イデオロギーに合わない言葉の修正などにあったのではないかと筆者は推察している。

王氏はかつて国民党に加入したり（1927年）、国民政府主席である汪精衛を名誉理事長とした中日文化協会から補助金を受けて日本に散佚した稀有な小説戯曲の書物を撮影したりした（1941年）という「汚点」があったため、新中国成立後、親日知識人として周作人のように投獄されてはいなかったが、1949年9月からは反動的人物として華北大学政治研究所で一年間の思想改造を余儀なくされた。これゆえ、

王氏はこの修訂増補本で「立場に甚だしく違反する言葉を修正した」のである。これがこの修訂増補本の最大の特徴となっている。

例えば、農民反乱の指導者で首都の北京を陥落させ明朝を滅ぼした李自成に対して、王氏は原著の「闖賊」を「闖王」と、「流賊」を「起義軍」と修正している。また、湯顯祖の『還魂記』が一世を風靡しているために読者による作中のヒロインの後追い自殺現象に対して、青木は「是れ婦女子の事、未だ以て作者の栄と為すに足らず」と評しているが、王氏は「男尊女卑の意識を露呈させてしまったこと」を理由にこの評語を削除している。だが、王氏は「他にもこのような誤ったイデオロギーを招きやすい言葉が幾つかあったため、そのすべてに修正を施した」というが、実際には共産主義のイデオロギーに違反するような内容ではないと思われる清代の蔣士銓による「雪中人」という伝奇の梗概も2500字ほど削除している。筆者の調べた限り、原著から大幅に削られたのはこの一箇所のみであった。

これらの修正は新政権の影響とも見受けられるため学術的な立場からすれば、この修訂増補本は初版本に見られた原著のままを忠実に訳すという原則から隔たりが生じたものと言わざるを得ない。

とはいうものの、この修訂増補本は学術上での修正も施されているので、公正な評価を与えなければならぬ。その二つ目の特徴として、これらの学術的修正に王氏自身によるもののみならず、青木や読者からの指摘も反映されている点が挙げられる。王氏自身の修正について二つの事例を挙げる。

青木は明代の沈采の南戯作品「千金記」の梗概を紹介する際に、その42齣から50齣にかけての粗筋を「漢の王業成り、韓は汝真王に封ぜられ、簫何及張良に餞別せられて榮帰す」³⁾とまとめている。下線部は43齣「封王」にある「詔書已到。跪聴宣読。皇帝詔曰。朕惟天造草昧。非武不克。頼爾大將軍韓信。連平魏趙。繼定齊楚。有功当封。从古大典。矧聞大丈夫興邦定国。宜封汝真王。以定齊地」から練り上げられたものと推測できる。この詔書を出された背景として、趙齊両国を征服後の韓信が功を笠に着て、劉邦に齊国の「偽王」(仮の王)として封じるよう求めており、劉邦は不機嫌だったが、韓信の反乱を懸念したため、大丈夫がやるなら「真王」になれ、「偽王」なんか要らないと返答せざるを得なかったという。この劇では以上の背景を説明していなかったため、青木は韓信が劉邦に汝真王と封じられたと誤解している。実は、この「真王」は「偽王」に対して使用される言葉で、「汝」と関わらせてはいけないのである。初訳本で王氏はすでにこの間違いを修正したが、落丁のため「韓封為齊王」となっていた。改めてこの修正増補本では「韓被封為齊王」と修正している。

二つ目の例として、王氏は最新の研究成果を積極的に取り入れて原著のミスを改正している。その一つに傅芸子の研究成果がある。1932年4月に傅芸子は京都帝国大学文学部の支那語教師として招聘され、講義の余暇を活かして日本国内の各公私蔵書機関に収蔵している戯曲小説の珍籍を蒐集していた。そうして傅芸子は、「葫蘆先生」(別名は「没奈何」と「杜祈公看傀儡」と「鬱輪袍」とから成る『明人雜劇三種』という戯曲集を内閣文庫で発見した。この三つの劇の作者はいずれも明記されていなかったのだが、傅氏が全て明代の王衡の手によるものだと明らかにしたのであった⁴⁾。この戯曲集は中国ですでに散佚していたため、『曲海目』には、王衡に「長安街」と「没奈何」との二種の作があるとされていたた

3) 前掲青木正児『支那近世戯曲史』、171頁。

4) 傅芸子「内閣文庫読曲記・下」(『朔風』第5号、1939年4月)183頁。

め、王国維の『曲録』（1909年）や姚燮の『今樂考証』（1935年）、そして青木の原著はいずれもこの見解を踏襲していた。これに対して傅氏は「葫蘆先生」の楔子として明記されている「没奈何哭到長安街、弥勒仏跳入葫蘆裏」との一句に基づき、「没奈何」と「長安街」とは実際に同じ劇だと証明している。王氏はこの新出の資料により修正増補版で該当部分を訂正したのである。

また、初訳本が出た後、青木は手紙で誤訳の箇所を王氏に伝えていた。前節に述べたように、初訳本は出版された翌3月20日、王氏がこれを青木に進呈したことで、青木はその訳書の中に誤訳を一箇所発見している。それは原文の「近年清の黄丕烈が士礼居旧藏の元刊と称する『新刊巾箱蔡伯喈琵琶記』の影印本出版せらる」のところで、王氏は使役形の「出版せらる」を見落とし、「近年清黄丕烈出版士礼居旧藏稱為元刊本之『新刊巾箱蔡伯喈琵琶記』影印本」と訳していたのであった。この指摘を受けて、修訂増補本では「近年所出版的号称清黄丕烈士礼居旧藏的元刊本『新刊巾箱蔡伯喈琵琶記』影印本」と訂正している。

さらに、初訳版の出版後、読者からの意見や指摘も王氏のところに寄せられていた。青木の原著には清の嘉慶以前の花部の戯曲作家を挙げる際に、辻聴花の『支那芝居』を引用して「梁巨川・三麻子・夏月珊・夏月潤等の優伶も亦稍や編する所有りしと云ふ」と述べている。王氏に忠実に漢訳された該当部分に対して、当時北京大学国文科の教授であった羅庸は王氏に手紙を送り、梁巨川は俳優ではないという旨を伝えるとともに、「再版時にはこの誤りが訂正されるように手紙で青木氏にお伝えいただけることを願ってやみません」と依頼している。王氏はこの羅庸からの手紙を全部書き写して青木に送ったが、原著の第二・三版には相変わらず訂正がなかった。しかし、青木はこの羅庸からの指摘を原著の原稿に書き入れていたため、青木の手沢本に基づいて編纂された『青木正児全集』第三巻には、これが収録されており、「後記」の形で示されている。残念なことに、初訳本以降の諸版本ではこのミスもいずれも訂正されなかった。

この修訂増補本の三つ目の特徴は、原著の附録「曲学書目挙要」の後に、さらに新出の戯曲資料を増補していることである。修訂増補本の最後には、初版本に「附録一」「附録二」として添付されていた王氏による二本の論考が保留されており、原著にある「曲学書目挙要」が「附録三・曲学書目挙要」と名称変更したうえでそのまま附録されていた。このほか、「附録四・曲学書目挙要補」と「附録五・奢摩他室藏曲待価目」（奢摩他室は呉梅の書齋名）という原著が刊行されて以降の新出戯曲書が新たに増補されていた。これらの戯曲書の表記形式はむろん、原著の附録「曲学書目挙要」に倣っているが、その量は原書の二倍ほどとなっていた。

しかし、青木による原著の「附録三・曲学書目挙要」と王氏による「附録四・曲学書目挙要補」は性質から言えば同類ゆえに、一つに整理すべきだったと思われるが、以前の紙型を取っていたので、出版社の中華書局は手間や人件費などの経済的事情を考慮して一つにしなかったのである。因みにこの王氏による附録四では、廬前が校訂した『元人雜劇全集』（77種、1935～36年）、鄭振鐸や王季烈が校訂した涵芬楼蔵版の『孤本元明雜劇』（138種、1941年）、同じく鄭振鐸の提案で刊行が決まった歴代の戯曲脚本を網羅するという大型プロジェクト『古本戯曲叢刊』第一集（100種、1954年）の細目までも列挙されている。最も注目すべきは、王氏自身が日本の内閣文庫や尊経閣文庫などで撮影した『新刊徽板合像滾調楽府官腔摘錦奇音』（明万曆39年刊）や、『新刻京板青陽時調詞林一枝』（明万曆新歳刊本）などの六種の

貴重書が載せられていることである。

また、附録五は初訳本に序文を寄せていた呉梅が収蔵していた稀有な戯曲書目である。1932年3月21日に勃発した第一次上海事件により数々の貴重な戯曲台本まで売却せざるを得なかった呉梅は、327種にも達する蔵書リストを書き記していた。因みに、1940年4月24日、当時東京文理科大学で教鞭を執っていた王氏は、京都にある青木の自宅を訪問した。手厚い招待を受けた王氏はお礼として、この蔵書リストを書き写して同年の5月1日に青木に贈っている。この蔵書リストの中には『南府鈔本曲稿十三種』や『吟風閣全譜』のような孤本が多数見られる。

また、上述した通り、王氏は原著を忠実に翻訳したのみならず、原著の理解を資する参考文献を30箇所も加えたり、自らの論考と蒐集資料を附録したりしていたため、その量は何と原著の三分の一に達している。それゆえ、「私の修訂増補の程度はすでに単なる翻訳の範囲から超えていた」、「原著者にこれらの修正の責任を負わせてはいけない」と、訳書の出来栄にそれなりの責任を持つべきだと考慮し、初版本の「王古魯訳」を「王古魯訳著」と改めたのである。

三、光に当たらなかった譚正璧の校正を経た三版本

出版時期から見ると、1956年1月に出版された三版本は1954年9月の修訂増補本とわずか一年四ヶ月しか経っていなかったが、出版社は北京の中華書局から上海の文芸聯合出版社に変わり、分厚い一冊にまとめて出されていた。では、短時間内に修正を行われたこの三版本と修訂増補本との間には、如何なる修正が見られるのであろうか。

老冷君を筆名としていた北京大学の歴史学者である羅新は2002年に北京の潘家園という古書店街で、「全書には朱筆での書き入れや修正が見られ、それが無い頁など無かった」という王氏所蔵の修正増補版を入手した。出版社はこれらの書き入れに従い三版本の修訂を行ったのである。この修正増補版に収められていた「重版本的修訂増補」（1954年1月4日に書き下ろされた）の最後の余白に、王氏は以下のような手書きの追加文を加えていた⁵⁾。この追加文からは修正増補版にさらに修正を施した理由を窺うことができる。

昨年、ある書局にこの書を渡して印刷してもらった。11月中旬頃の献本を受け取った後に、一読してみたところ、修正すべき箇所が修正されていなかったところが多く、とりわけ旧版の中で立場に甚だしく違反する表現でさえも、私の修正した言葉通りに改められなかったところがなんと数箇所も残っていた。私は直ちに手紙を送り、これらのミスを指摘して注意を促すとともに、発行済みの書籍に対して速やかに正誤表を配布するよう指示したが、「何とかする」とのいい加減な返信しかもらえなかった。あいにく当時は、私の病状が深刻になっていた頃で、不眠症に加え、高血圧から狭心症に悪化する一方であったために、急遽入院して治療を受けざるを得なかった時期であった。

5) この追加文は羅新による「王古魯日本訪書記」(<https://book.douban.com/subject/2173319/>)というブログに掲載されている。閲覧日：2023年9月9日

退院後、別の出版社から刊行してもらうことにしたが、容体が危機的状況から脱したとはいえ、医師の指示に従って在宅で療養するよりほかなかった。このような長病を経て物忘れがひどくなったため、同書局の返信していた「何とかする」が実行されたかどうかについては、まだ問い合わせをもしない有り様であった。このような手落ちが生じたことを、ここで読者の皆様にお詫びを申し上げねばなるまい。

一方で、今回の上海文芸聯合出版社は、この書に極めて謹厳で責任感のある態度であったため、療養中の私は集中できないことに配慮して、かわりに譚正璧氏に校閲してもらった次第である。譚氏は自らの深刻な眼病を押してまで、入念な校正や照合の結果、少なからぬ句読点のミスと誤字を見つけてくださったほか、私が原著の誤りに気付かぬままに漢訳した数箇所をも発見してくださいました。改めて感謝の意を表さねばならぬことである。今回の経緯より、校閲とは頗る緻密な作業ゆえ、わずかばかりでも気を抜くことがあってはならない、とつくづくと感じ入っている。今回の出版は細やかな校閲を経てはいるものの、誤りが全くないと断言できるほどの自信は持てない。さらなる修正が加えられるように、読者からのご指摘を願ってやまない。最後に、多忙な中私になり代わり出版に奔走してくださった文懐沙氏にも感謝を申し上げねばならない。

1955年 8月 古魯により追記

このやや長い追加文から、王氏が出版社を変更した理由は前述したイデオロギーの言葉をはじめ、指示していた言葉が修正されていなかったところにあっただとわかる。冒頭にいう「ある書局」とは、いうまでもなく修訂増補本を出した中華書局である。変更後の上海文芸聯合出版社はこの訳著を丁寧に取り扱い、深刻な高血圧と狭心症に悩まされていた王氏の代役として、譚正璧氏に校閲してもらった。王氏と同齢の譚氏は当時病気で山東大学の教職を辞めて自宅療養していたが、同出版社の社外編集審査委員を兼任していた。ただし、詳しい理由は不明であるが、活字された三版本では、王氏による上記の追加文の下線部分のみは植字されず、校閲者の情報などが人為的に削除されてしまっていたため、今までの研究において、王氏のかわりに校正を行った譚正璧の名前は一度も言及されていなかったのである。

活字となった三版本では譚氏の名前は何らかの理由で削られているが、幸いなことに、近刊の『譚正璧友朋書札』では王氏から譚氏に宛てた書簡が八通見られ、これらの書簡を通じて訳著の校閲に心血を注いだ譚氏の役割はようやく明らかになった。なお、これらの書簡を通読してみれば、譚氏は深刻な白内障を患ったにもかかわらず、羅新氏の購入した上述の修正増補本の上で赤の書き入れが見えないページがないほどの修正を施してから、王氏に送りその修正を確認してもらった後にまた送り戻すという校閲方法を取っていたことがわかる。譚氏による修正は句読点のミスや誤植のような明らかな間違いのほか、主に以下の四点に集約できる。

一つ目は出典との照合に基づく戯曲名への是正である。例えば原著の第一章で、青木は宋代の雑劇と院本を論じる際に、「其の脚本の今に存するもの一つも無し。只吾人の知り得べきものは其の曲目のみ」としか記していない。王氏はこの一文への参考として元代の陶宗儀の『南村輟耕録』から題名しか残存していない690種の院本を列挙しようとしたが、手元にこの資料が存在しなかったことから、呉梅の『中国戯曲概論』を孫引きするほか仕方なかった。しかし、『南村輟耕録』は和曲院本として「四皓逍遥楽」

と「四酸逍遥楽」を二種挙げてはいたが、呉梅は著書でこの部分を引用する際に、原稿の書き違いか組版の誤植かは不明だが、この二つの名称をどちらも「四皓逍遥楽」となってしまうていた。原典と照合した譚氏はその混同が誤りであることを王氏に指摘したのである。ところが、このミス指摘された王氏は自身では原典と照合しようともせず、「私は修正しないほうがよいと思います。これは私の付け加える資料なので、修正するか否かは我々で決めます」⁶⁾と返信している。実のところ、王氏は初訳本ではしっかり呉梅の間違いを直していたのだが、修訂増補本では誤植のせいか呉梅の混同に戻されてしまっていた。因みに、最新本ではこのミスが訂正されている。

また、完全な脚本が伝わっている花部の戯曲を挙げる際に、青木は「桃花女・周公鬪法・沈香太子・劈山救母・五雷轟（以上五種『劇説』巻一に見ゆ）」と述べているが、実は一番目と二番目は一つに、三番目と四番目は一つにすべきである。ゆえに、三版本で譚氏は「桃花女周公鬪法・沈香太子劈山救母・五雷轟（以上三種見『劇説』巻一）」と改正している。なお、王氏は後にもう一つの「義児恩」が新たに見つけたので、四版本ではこの中に加えてもここで触れておく。

二つ目は同名異種により生じる誤解への是正である。青木は崑曲極盛時代の伝奇を論じる際に、明代万暦期の周朝俊の『紅梅記』を挙げている。しかし、その原本が未見だった青木は呉梅の『中国戯曲概論』に基づいてその梗概を紹介するにあたって、「明万暦間の書『繡谷春容』（巻十）に小説『古杭紅梅記』有り、殆んど此記に本づきて之を作れり、並に以て其情節の大意を見るべし」⁷⁾と述べ、伝奇『紅梅記』と小説『古杭紅梅記』の題名が似ているというだけで、伝奇『紅梅記』は小説『古杭紅梅記』から改編されたと判断を下してしまった。実はこの二つの作品には何の繋がりも存在しない。譚氏にこの誤解を指摘された後、王氏は紙型を変えないで済ませるために、該当の削除されるべき間違いを点線に書き替えている。

三つ目は原著にあった日本の戯曲の専門用語を省略するという原則が不徹底であったことにより理解に障害を来たしたことへの対応である。青木の原著では日本人の読者に中国の戯曲を理解しやすくするために、日本人になじみの謡曲や浄瑠璃を引き合いとして出すことがしばしば見られた。これは即ち第一節で触れた初訳本の二つ目の特徴である。一方で、これらの類比は中国の読者にとってはかえって難解なものになってしまう。それゆえ、王氏は初版本の「訳者叙言」に「日本の読者の理解に役立つために原著に出された日本戯曲の専門用語は省略する」と断り書きを記している。例えば、青木は伴奏用の楽器の違いにより南曲と北曲との節の相違を説明する際に、「北曲は琵琶を主樂とし、南曲は鼓板を主とせしと云ふ。楽器の性質の相違が曲情に影響する所あるは吾人の往々経験する所なり。即ち等しく三弦を用ふと雖も器の大小により義太夫と江戸浄瑠璃とが示せる曲情の差異の如きは最も手近かなる一例なり」⁸⁾と説明している。日本の戯曲の専門用語を省略するという王氏の原則に則れば下線部は省略すべき対象となるが、修訂増補本では原著のまま漢訳されていた。日本の戯曲に対する知識を望むべくもない譚氏はこの訳文中の「義太夫」と「江戸浄瑠璃」に解釈を加えたほうがよいと提案していた。これを受

6) 樊昕編注『譚正璧友朋書札』（浙江古籍出版社、2021年）245頁。

7) 前掲青木『支那近世戯曲史』、432頁。

8) 前掲青木『支那近世戯曲史』、432頁。

けた王氏は、紙型の都合も兼ねてか、下線部を全て削除している。

四つ目は附録の「曲学書目挙要」で列挙されていた曲への補足や校正である。例えば原著では清代の許鴻磐による『六観楼北曲六種』の項目を「西遼記・雁帛書・女雲台・孝女存孤・儒吏完城（一種失記）」と列挙していたのだが、譚氏は調査を通じて欠如している一種が「三釵夢」だと判明している。このような細かい補足にとどまらず、譚氏は新出資料をさらに追加しようと提案している。これは王氏の返信にある「この書に付け加えられている私による附録はすでに全附録の三分の一ほどにも達している。この割合からすれば、主役である本来の附録の地位を奪い取る嫌いがあるので、もしもこのうえさらに附録を追加するということであればそれはよくないと思う」という文面から窺える。この返信を受け取った譚氏は附録四に列挙されている『古本戯曲叢刊』第一集の続きとなる第二集（100種）だけは少なくとも追加しようと粘っていた。これらの提案を受けて王氏は「『古本戯曲叢刊』第二集の目録は入れたほうがよいと思いますので、出版社側とご相談いただきたいです。私の添附した「曲学書目挙要補」は多くの曲本が欠けていましたから」と認めているものの、「『古本戯曲叢刊』第二集の目録の添附の件は私を煩るためらわせております。紙型のズレをもたらしめますから⁹⁾」という懸念を吐露している。譚氏は出版社側と交渉した結果、以前の紙型を変えないように、これらの新出資料を「附録四・曲学書目挙要補」の中に挿入するのではなく、「附録五・奢摩他室藏曲待価目」の後ろに、「新一版附録・曲学書目挙要再補」という新たなカテゴリーとして添附することになった。

なお、上記の四点のいずれにも当てはまらないものとして、王氏と譚氏ともに原典と照合しなかったことにより生じた誤りが存在していたことも、ここで指摘しておかねばなるまい。青木の原著では南戯の発達過程における諸宮調からの影響を論じた後に、次のように例示したうえで説明を加えている。

南戯に於ける其の影響を認むるならば其れ以後の事を考へざる可からず。諸宮調は元代にも流行せしこと明かにして、王伯成に『天宝遺事』の作ありて今に存するの外、元人の著なる『青楼集』に趙真真・楊玉娥が諸宮調を善唱し、嘗て張五牛・商正叔編する所の「雙漸小卿怨」を唱へる由を記し（後略）¹⁰⁾

初訳本と修訂増補本とはいずれも青木の原著のまま漢訳されていたが、誤植のせいか、波線で示している「商正叔」が「趙正叔」になってしまっていた。このミスは譚氏の校閲を経た三版本や蔡毅の校訂を経た最新本を含むすべての版本で修正されなかったものである。譚氏はこのミスを見つけられなかったにもかかわらず、「雙漸小卿怨」の「怨」は「怨」の誤りではないかとの疑問を王氏に提起していた。これを受けた王氏が病軀を押して二度も北京図書館へ調査に向いた結果、青木の原著と同じ記載であることしか明らかにはできなかった。有力な証拠を得られなかったため、原著に記されている「雙漸小卿怨」のままにするほか仕方がなかった。

実は、これについては青木の原著も譚氏の指摘もどちらも誤りだったのである。この1355年に刊行さ

9) 前掲樊昕編注『譚正璧友朋書札』、244頁。

10) 前掲青木『支那近世戯曲史』、61頁。

れた『青樓集』には幾つかの版本がある。時系列に挙げれば、元の陶宗儀により編輯されて明の陶鈺により校正された『説郭』、明の無名氏により編輯された『説集』、明の陸楫により編輯された『古今説海』、清末の葉德輝により編纂された『双梅景暗叢書』の四つにそれぞれ収録が存在する。このうち、二つ目の『説集』を除く残りの三つの版本を見ると、その「趙真真・楊玉娥」の条目には、「善唱諸宮調。楊立齋見其謳張五牛、商正叔所編『雙漸小卿』、恕因作〔鷓鴣天〕及〔哨遍・耍孩兒・煞〕以咏之、後曲多不録（後略）」¹¹⁾と、「恕」を含んだ解説がある。この問題について、清末の姚華の戯曲著作『菴猗室曲話』によれば、「恕」は衍字なので削除すべきだという¹²⁾。これゆえ、譚氏の校正を経た三版本もまだ完璧とは言えないことになる。

それにもかかわらず、この三版本は前の修訂増補本よりしっかりと整えられたものとなっているのだから、譚氏の校正作業を決して無視してはならないのである。王氏から譚氏に宛てた八通の書簡を読めば、重病であった王氏は気力や体力に限界があり、校正作業をほとんど譚氏に一任していたことがわかる。したがって、この三版本は最新本の表記のように「王古魯訳著」の後に「譚正璧校訂」と付け加えるべきである。

また、この三版本に関する間違った見解をここで是正しておきたい。最新本の最後に記された校訂者の蔡毅による「校訂後記」では、「該書は1936年に上海の商務印書館により出された後、1954年に北京の中華書局により修訂増補本が出された。そして1956年に上海の文芸聯合社により重版された」と述べられているのだが、以上の論述を通じて、この1956年に出た三版本は修訂増補本の重版ではないことが分かる。

四、命を絶つ前にさらなる修訂が加えられた四版本

三版本が出されてわずか二年足らずの1958年1月に、病状が些か緩和されていた王氏は三版本に基づき、さらなる修正を加え四版本を出した。この四版本は修訂増補本と同様に上下二冊に分けて出版されており、出版社は上海の文芸聯合出版社から北京の作家出版社に変わった。では、これほど短期間で出された四版本とは、三版本に如何なる修正を加えたものであったのだろうか。

この四版本の奥付に書かれた「出版説明」では、「本社は古い紙型を利用して今回の版本を出しているため、最近訳著者から修正が加えられた数箇所は、いずれも以前の紙型の上で削ったり補ったりしたものである。その他、訳著者王古魯は序文を新たに書き直していた。なお、附録の参考書目も大幅に増補した」と述べている。ここから、四版本は以前のすべての版本と同一紙型を使っていることが分かる。ただし、正確に言えば、「訳著者叙言」と名付けられたこの序文は、すべてを書き直したわけではなく、三版本に載っている「訳者叙言」と「重版本的修訂増補」から取り入れた部分も見受けられる。例えば、王国維の『宋元戯曲史』やこの著作の青木に与えた刺激、青木の原著にあった句読点のミスの指摘など

11) 夏庭芝著・孫崇濤、徐宏図箋注『青樓集箋注』（中国戯劇出版社、1990年）91～96頁。

12) 初出は1913年3月23日から同年12月13日にかけての雑誌『庸言』（第1巻第6号～第24号）で、後に任中敏により編輯された『新曲苑』第8巻（中華書局、1940年）に収録されている。

が、「訳者叙言」と「重版本的修訂増補」からそのまま組み入れられている。新たに書き加わったのは、上述した日本の内閣文庫などの蔵書機関で撮影した資料やその価値の紹介である。その一方で、初版本の呉梅による序文と修訂増補本の羅新氏の入手した版本に見られる手書きの追加文は削除されている。

なお、この「訳著者叙言」では青木の間違った見解を王氏が修正している。それは「嘉靖に至り弋陽の調は絶ち、楽平や青陽の調に変わってしまった」という湯顕祖の論述を踏襲した青木が、明代の嘉靖になって弋陽腔（腔は節回しのこと）が絶えてしまったととらえている。北宋時期に盛んになった南戲は、南方各地の風土と融合し、海塩腔や余姚腔、弋陽腔、崑山腔（崑曲）といった独特な歌い方が派生していった。明代の永楽期から清代の乾隆期にかけて、節回しを柔軟に変えて地方の方言で容易に歌える弋陽腔が全国を席卷したことで、さらに徽州腔、楽平腔、青陽腔などの膨大な亜流系統が生じていったのである。ゆえに、湯顕祖の言った「弋陽の調は絶ち」は彼の居住地の宜黄で消失したという意味だったが、青木はこれを全国範囲で煙滅したと誤解していた。この弋陽腔の亜流として王氏に取り上げられていた滾調や青陽調は、第二節で触れた修訂増補本の「附録四・曲学書目挙要補」に挙げられていた内閣文庫や尊経閣で王氏自ら撮影した稀観戯曲資料に見られる。王氏は修訂増補本を校正する際、日本で撮影した膨大な写真から、弋陽腔から滾調や青陽調への変遷軌跡を浮き彫りにする『明代徽調戯曲散出輯佚』の編纂作業も同時に行っていた。それゆえ、王氏は11頁にも及ぶ「訳著者叙言」の三割ほどの紙幅を割いて弋陽腔とその亜流と論じることができたのである。

その一方で、この「訳著者叙言」では四版本の修正範囲について、「(一) 文字上の誤訳。(二) 新たに発見した資料に基づく原文への修正や注記。(三) あまり都合がよい言葉への修正」と簡潔に説明をつけているが、具体的な修正の実例までは挙げていなかった。ところが、九十年代になって、台湾中央大学の戯曲学者である洪惟助が北京の古本屋で、王氏による修正の書き込みがある三版本の原本を購入した。洪惟助はこの三版本の精査を通じて、原文と修正文との対照表を公表している¹³⁾。

この洪惟助による対照表を四版本と照合したところ、この四版本もやはり以前の紙型を利用していたので、ページのズレをもたらしなない句読点や誤字の訂正は行われていたが、長い注記は毎章の最後ページの空白を活かして添附されており、紙幅が足りないところは割愛していたことが分かった。なお、修正範囲(三)の「あまり都合がよい言葉への修正」については当てはまる修正が見当たらなかった。実はこれは今回の修正範囲ではなく、前述した修正増補本の校正時に出版社側の怠慢で行われなかった「立場に甚だしく違反する言葉」の修正を指しているのである。これらの修正作業はすでに三版本で済ませられていたため、この四版本では修正箇所がなかったのである。

この対照表によると、王氏の修正は120箇所にも達しており、そのうち句読点や誤字の訂正が八割近くも占めていた。さらに欄外注記やメモ用紙の貼り込みのような長い注記が23箇所も見られたそうである。このような長い注記のうち、第三章「南北曲の分岐」と第四章「南戲の復興」に五箇所しかなかったものの、それらの注記を合わせると2600字以上に達していたため、比較的短い書き込みを除き、紙型維持の理由から長い注記は四版本に反映されていなかったのである。

13) 洪惟助「王古魯訳著『中国近世戯曲史』修訂補充手稿輯録」(中国戯曲学会編『中華戯曲』第56輯、2018年) 71～84頁。

王氏による修正の実例を見ると、例えば、院本の題名「天地長久」、『綴白裘』中題有「精忠記」之「奏本」一齣、「此二種以与泥神廟同一性質之劇」、「孟啓「本事詩」」を、四版本ではこれらをそれぞれ「天長地久」、「秦本」、「似」、「槩」と直していたにもかかわらず、最新本では三版本のままに戻されており間違った情報が記載されている。

最後に、王氏が短時間内に四版本を出した内なる理由を推察してみる。「1956年12月古魯重識於北京」と王氏による「訳著者叙言」の完成時間に示されているように、1956年1月に出版された三版本から一年足らずの隔たりしかなかった。言い換えれば王氏は高血圧や狭心症を患っていたにもかかわらず、このわずかな期間で上述した120箇所¹⁰の修正や注記を終えたことになる。重病による肉体的な苦痛のみならず、家族間の不仲や政治運動で受けた批判などの精神的な苦悶にも堪えられなくなり、この四版本が出た1958年1月の八か月後、王氏は大量の睡眠薬を飲んで自ら命を絶っている。自殺までを念頭に置いていたかは定かでないが、長年心血を注いできたこの訳著を可能な限り完璧に仕上げようという王氏の切望こそが、この短時間内に増補を行わせた原動力だったのではないかと筆者は推察している。

五、版が重なった台湾本・香港本と改善の余地がまだある最新本

1947年10月に設立された商務印書館台湾分館は、第二次国内内戦で中国大陸の共産党に敗れた国民党が台湾で独立政権を建立させたことにより、1949年に北京総社から離脱して台湾商務印書館と改称を余儀なくされた。1965年3月、この台湾商務印書館は初訳本の紙型を取り、「漢訳世界名著甲編・六百冊」という叢書の第89冊として上製本で再版している。興味深いことに、著作権の責任を回避するための意図的なものであろうが、訳者の名前が似て非なる「王吉廬」と表記してあった。その後の1970年、1976年、1988年と幾度にもわたり、大学の教科書たる「大学叢書」として上下二冊に分けて再版された。ただし、1988年の重版本からは訳者の名前を王古魯に正確に表記している。

この香港本については、中華書局香港分局において1975年4月に四版本の紙型を取り上下二冊に分けて重版している。その表紙も見返しページに書かれている「出版説明」も四版本と同様であった。筆者の調査している限り、香港での再版はこの一回のみである。

また、最新本については、青木と同じく京大文学部出身の蔡毅の校訂を経て、2010年1月に中華書局により新たに版を組んで出版されたものである。蔡氏による「校訂後記」によれば、この最新本は初訳本を底本にして四版本に増補された注記を参考にしながら、「著者の手沢本の自筆書き入れは〔著者後記〕として、判読しうるかぎり挿入した」ものであり、『青木正児全集』第三巻に収録されている『支那近世戯曲史』（1972年）を照合して校訂されたものだという。青木の原著は1930年に初版本が出版された後、王氏から句読点のミスを指摘されていたにもかかわらず、1938年の二版と1955年の三版はそこに何の修正も施されず初版のまま重版されていた。しかし、1930年の初版本では青木は王氏の指摘やそれ以降の発見などを書き入れてあったため、蔡氏はこれらの青木による注記を漢訳して最新本に入れている。筆者が集計したところ、この注記は18条にも達していた。この注記の増補がこの最新本の一つ目の特徴である。

二つ目の特徴は、初版本で省略していた「中国の読者に難解な日本の戯曲の専門用語に対する省略」

への回復である。このほか、修訂増補本でイデオロギーのために修正・削除された「立場に甚だ違反する」表現や、かつて王氏が「罵詈雑言に近い」と評していた言葉も、北京の最新本では蔡毅の校訂を経て原著の表記に回復させている。

三つ目の特徴は、蔡氏による校訂や注記である。蔡氏は王氏の初訳本と青木の原著を丁寧に照合し、脚注の形で間違ったところへの校訂、難解や疑問のところへの注記をつけており、それらは37箇所にも及んでいる。例えば清末の震鈞による北京の地理風土書『天咫偶聞』の成立時間について、原著の割注には「光緒二十年著」と示してあった。これに対して、最新本の脚注では「此处疑有誤、據『天咫偶聞』作者於書中自述、此書始撰於光緒二十一年（1895）、成書於光緒二十九年（1903）」と訂正している。

とはいえ、上述した蔡氏の校訂を評価しながらも、最新本には誤字や不備がまだあることにも触れておかねばなるまい。残念なのは、三版本での譚氏による修正がほとんど最新本に反映されていないところである。

おわりに

本稿では青木正児の代表作『支那近世戯曲史』の漢訳本として、王古魯による初訳本の『中国近世戯曲史』から蔡毅の校訂を経た最新本に至る五つの版本を主たる対象に、それぞれの特徴や修正状況を考察した。

初訳本では、青木の原著に存在していた日本戯曲に関する専門用語が20箇所削られていたが、最新本では削られることなくほぼ忠実に漢訳されている。初訳本が出版される前に、王氏が青木に手紙で原著の句読点のミスを指摘していたことや、その出版後に初訳本を読んだ青木から王氏に誤訳を指摘していたことといった貴重なやり取りは評価されるべきである。さらには、青木の未見資料を王氏は積極的に蒐集し、原著を補足するために王氏自ら論考を二本附録したところも特筆すべきである。

新中国成立後に出された修訂増補本は、王氏自身が内閣文庫などの蔵書機関で撮影した稀覯本と新出の戯曲資料を附録の形で原著の「曲学書目挙要」の後に附録するという新たな研究成果も取り入れ、原著のミスや間違いに改正を加えている。ただし、この修訂増補本は王氏の過去の「汚点」のために無産階級の立場に反するイデオロギー的表現を修正されたものでもあった。

三版本は王氏の狭心症のためにほぼ譚正璧一人で校閲が施されたものであった。近年公表された譚氏に宛てた王氏の手紙によれば、戯曲名の正誤や、原著の誤解への是正、略訳による理解支障の指摘、戯曲書目の増補などの修正が行われたことが分かる。しかしながら、譚氏によるこれらの多くの修正があったにもかかわらず、何らかの不都合な事情により、王氏の手書きの重版説明からは譚氏の名前が削られてしまった。

四版本は王氏が死を覚悟して病状が些か緩和されている状況で修訂を加えたものであった。王氏は誤字の修訂や原著の句読点のミスへの是正のほか、自身の調査や最新研究成果を長い注記の形で大幅に補足していた。残念なことに、紙型のためにこれらの注記の全てが四版本には反映されなかった。

最新本は初訳本と四版本を底本にして、より整った原著として『青木正児全集』に収録されたものに基づき、それらを照合しながら蔡毅が校訂したものであった。初訳本での省略した部分に対する回復や、

修正増補本でのイデオロギー表現に対する復元に加え、脚注の形での補足や修正などが行われていた。残念ながら四版本ですでに指摘されていた句読点のミスなどが未改正のままであるところから見れば、最新本が最善の版本と言えるまでには至っていない。